

* 関 勝 則 「時代を映した横浜の歌」 探訪。

《16》 横浜本牧を日本中にアピールした「本牧ブルース」

写真:横浜市史資料室

1962(昭和37)年、「ダイヤモンド・ヘッド」などで知られるザ・ベンチャーズの来日公演により、日本中に響き渡った「テケテケテケ」という音。これをきっかけにエレキギターが爆発的に売れ、アマチュアバンドによるエレキブームが勃発しました。さらにザ・ビートルズの影響とともに日本の音楽界に出現したのがグループサウンズ(GS)です。今は山手に住む沢田研二のザ・タイガースやザ・スパイダースをはじめ全盛期には300を超えるグループが日本の音楽界に出現、GSが一世を風靡しました。

そんな中、横浜で活動するメンバーが集まり、本牧の外国人専門クラブ「ゴールデン・カップ」の専属バンドとして活動を開始し、「長い髪の少女」をヒットさせると一躍GSを代表する実力派バンドになりました。

彼らの出現とともに、当時米軍の海浜住宅地区であり、アメリカ文化の発信地だった本牧という街が注目されるようになります。



本牧にあったPX(米国軍隊内の売店)

そして、彼らの6枚目レコードとして1969(昭和44)年に発売されたのが「本牧ブルース」です。なかにし礼作詞、村井邦彦作曲のこの曲のレコードジャケットには「遂に出た! 横浜サウンド」をキャッチフレーズに「横浜・本牧」の認知度をアップに貢献しました。

1859(安政6)年に横浜が開港した当時、高い断崖があった本牧は、横浜港に向かう各国の船の目標でした。風光明媚な景勝地として愛されていましたが、太平洋戦争の横浜大空襲により大部分を焼失し、終戦後は米軍に接収されるという負の歴史がありました。そんな本牧ですが、ちょうどこの曲が世に出た頃がこの街の大きな転換期でもありました。当時の横浜は人口200万人を突破。首都高速の横浜羽田線が開通。横浜港内で最大級の規模と施設を有する本牧ふ頭が誕生し、日本におけるフルコンテナ船が入港しました。また、本牧ふ頭関連造成用地の埋立てによって整備された本牧市民公園もこの時期に誕生。隣接する三溪園とともに、四季折々の自然が楽しめる横浜のオアシスとして市民に親しまれています。

横浜でも独特の雰囲気がある本牧を舞台にした歌は、以後たくさん作られるようになりました。



関勝則の
市会日記

29年度決算特別委員会

こども青少年局関係審査(10月18日)より

10月11日から始まった29年度の決算審査は26日の採決をもって終了しましたが、その期間中に私が行った局別の決算審査についてご報告いたします。

児童虐待防止に向けた取組み

質問 児童福祉法に基づく子供にかかわる機関のネットワークである要保護児童対策地域協議会において、支援が必要な子供や家庭について、情報を共有し支援方針を話し合う個別ケース検討会議は重要であるが、その実績と今後について伺う。

答弁 29年度の実績は1629件で増加しており、26年度から区役所に虐待対応調整チームを設置し、関係機関との連携を強めてきたことが要因と考える。

質問 29年度の児童虐待相談対応件数は過去最高を更新相談件数が増えているのは地域力が発揮されているあかしではないか。こうした地域での気づきが児童虐待の早期発見、未然防止につながると考えるが、市民への啓発をどう進めていくのか。

答弁 「横浜市子供を虐待から守る条例」では虐待防止推進日(毎月5日)と推進月間(毎年11月)を定め公共交通機関や市内のイベント会場、商店街や企業との連携で虐待防止のキャンペーンを行ってきた。今後は地域とも連携して広報啓発に努める。

放課後児童育成施設

質問 放課後キッズクラブと放課後児童クラブの特色は。

答弁 キッズクラブは学校施設を活用し、全ての子供たちが利用することができる。児童クラブは留守家庭児童が対象で、家庭的な雰囲気のもと民間施設等を活用し、地域の理解と協力により運営されている。

質問 2つの事業ともに大変重要な施策と考えるが、両事業の今後の取組方針は。

答弁 キッズクラブの全校展開と児童クラブの面積や耐震基準適合に取組んでいく。そして両事業のさらなる質の向上を目指す。

地域による子供・子育て支援の推進

質問 地域の大人が子供たちとかかわる中で、子育て家庭を見守ることが子供一人ひとりの豊かな育ちや保護者の子育てに対する不安感・負担感の軽減につながると考えるが、副市長の見解を伺いたい。

答弁 子供は地域での様々な関わりの中で育っていくものと私も実感している。行政としても、様々な施策や事業を展開するにあたって、地域全体で子供を育てていく、見守っていくといった視点を大切にしながら子育て家庭を支える機運を醸成していく。

意見 子供・青少年は、家族や社会にとっても様々な可能性を持ったかけがえのない存在であり、未来を創る力である。向こう三軒両隣やお互い様といった地域における普段からの付き合いを大切にすることで、ともに支えあえるまちづくりが進むことを大いに期待したい。